

令和7年度 第1回 大津市社会教育委員会議 議事録（概要）

□ 日 時

令和7年7月15日（火）15時00分～17時30分

□ 場 所

大津市役所 新館7階 大会議室

□ 出席者

社会教育委員 11名

教育委員会事務局 10名（教育部長 ほか9名）

□ 傍聴者

なし

□ 内 容

1 開会

2 あいさつ

3 議事

建議について

「どの子どもも取り残さない 地域と家庭の教育力を高める施策の推進について」に関する調査研究

4 その他

5 閉会

□ 主な質疑・意見等

「どの子どもも取り残さない 地域と家庭の教育力を高める施策の推進について」に関する調査研究

【事務局】

資料1、資料2について説明

【委員】

小学1年生の孫は、引っ越したばかりの引っ越し先で自分から友達を作っており、学校は幼稚園より楽しいと言っていた。環境が変わると萎縮することもあるが、親が子供の話を受け止めて聞いているのだろう。日頃の関わり方が、子供がどんな環境にも馴染んでいける、

そういう素養をつくるのだと思う。

【委員】

子供の声をしっかりと受けとめてくれる人が、一人でもそばにいることが非常に大事。

私の活動している「チャイルドライン」は、子供からの電話相談を全国で年間 20 万件ほど受けているが、多くの子供たちが自分の声を聴いてもらえていない。多くの家庭は忙しくて子供の意見を聞く時間が無い、学校の先生にも忙しくて話を聞いてもらえないとなると、子供はいじめや嫌なことがあっても自分からは言わなくなる。

資料 2 に「自由に意見を表すことができる」とあるが、子供は、言ってもよいという確信や受け止めてもらえるという実感がないと、虐待やネグレクトにあっても何も言わず、心を閉ざす姿が多く見られる。コロナ禍以降、地域での居場所が少なくなっているのも、まずは学校で、先生が子供の声をじっくり聴いてあげる体制をつくるのが大事だと思う。

【会長】

今の「子供の声を受け止める人がいる」を具体策とすると、資料 2 の「子どもが抱える課題」の一つ目の項目になる。また、2, 3 番目の項目にも関わっており、幅広く具体的な取組として入れるべきである。

また、今の話は、京田辺市のコミュニティセンターの事例に通じるところがある。行政管理上は無駄な人員かもしれないが、その施設には暇で話を聞いてくれそうな大人がおり、子供らにとってその人と話をできることが、施設の良さになっていた。子供らは大人の様子を見て察しており、余裕のない大人には話をしない。子供の声を受け止める余裕を大人が持てるかどうかが課題だと思う。

また、その施設では、開設時に利用のルールを作らずにいたら、子供らが自分たちで作ったということだった。この取組で面白いのは、ルールを作って管理するのではなく、自分たちでルールを考えるとという自治をさせたこと。これは自由に意見を表現することだけでなく、色々なところにつながってくる。

【委員】

知り合いに、定年後に学童保育所を手伝っている人がいる。話を聞いてくれるボランティアということで非常に人気があるらしい。先生が忙しくしている中、経験があり話もわかるボランティアがいたら子供は嬉しいのだろう。

【会長】

現役の時とは違う余裕があり人気があるのだろう。そういうものが社会の中に必要。

【委員】

資料2の「現状と課題」で課題が並んでいるが、ひとり親家庭の増加も言葉として載せておくことが必要。見過ごされがちであるところに目配りをして、可視化すべきである。

今議論をされていた、子供のつぶやきを受け止め、そのまま良いと示してくれる他者を求めることと、資料2の「達成目標」の「自由に意見を表すことができる」の表現には乖離があると感じた。子供が明確に意思表示をすることと疑問や不安をつぶやくことはニュアンスが違うので、違いがわかるように表現する必要がある。

また、「達成目標」においては子供が主語になっている。それ自体は問題ではないが、福祉の世界で期待されているのが、ありのままの姿の子供を周りの人が助け、地域がつながりボトムアップして環境を整え、みんなが幸せになるということだとすると、主語を全部子供にして良いのだろうか。

【会長】

今の委員のお話からすると、「自由に意見を表すことができる」は、児童生徒の到達目標としての完成形ということである。実際の子供たちは、自分の思ったことを言語化し人に伝えることができるという第一段階にあるため、「達成目標」の書きぶりを見直すべき。家庭や地域が主語の場合も考えてよい。子供たちが主語のもの、家庭や地域が主語のもの、それぞれあれば良いという委員からの問題提起かと思う。

【委員】

社会的に言えば、家庭、地域、行政とだんだんとマクロに広がっていくイメージで学校というものを取り上げると、地域における学校以外の様々な諸団体がフォーカスされていない風に捉えられてしまう。あえて地域の横に学校を入れる意味を考えたほうが良い。例えば、児童館やこども食堂など色々なところが子供たちのために活動しているにも関わらずフォーカスされないと、私たちはもういいのかなと思ってしまう。

【会長】

学校という義務教育施設を取りまく地域には、自治連合会だけではなく児童館やこども食堂もある。「地域」は自治連のことだと思う人もいるので、その他の子供たちを取り巻く多様なものをひとくくりにして「地域」という一言に入れ過ぎず、丁寧な書きぶりにした方が良い。

【委員】

地域、学校、家庭が共に取り組んでいる朝の通学路の見守りについて、大人が「どうぞ！」と子供を横断させているが、これは良くないと思う。子供たちには失敗する場を作ってやるべきで、失敗した時にどうすれば良いのか教えるのが、地域あるいは学校の先生。地域の大

人は見守りだけでなくそれをしないとイケない。昔は遊びの中で嫌というほど失敗して、どうしたら安全を保てるかを学んだ。教育方法をもっと考えるべき。

【会長】

安心して暮らすには、子供たちが自分の安全や安心について考えて行動ができることが大事だという、委員の問題提起はよくわかる。

子供たち自身が身に付ける能力の話と子供たちの環境がこうあるべきということは、目標を分けて書いたほうが良い。

【委員】

私は自治連合会で活動しているが、年度のスローガンは、毎年安全安心なまちづくりとなっている。うちの学区では、小学校の朝の集団登校はなくなった今も、みんなで一緒に登校している。帰りはバラバラだが、地域のお年寄りが声をかけてくれる。PTAはなくなったが、学校では子供とお年寄りが一緒にサツマイモ栽培して、地域のつながりが保たれている。

【委員】

私が毎朝バス停でバスを待っていると、集団登校を見守るおじさんたちが子供に「どうしたんや?」「久しぶりやな」「学校長いこと休んでたんかいな」「今日は元気ないなあ」と声をかけている。「おっちゃんは毎朝ちゃんとあんたのこと見てる」というメッセージが届いていると感じる。自分のことを気にかけて見てくれている人がいると思えるだけで、子供は今日もちょっと頑張ってみようと思えるのではないか。子供に安全安心の力をつけるのはすごく大事なことだが、この方たちの役割はむしろこういう所にあるのだと思う。

【会長】

子供への声掛けが主目的ではないかもしれないが、本当はそこに大きな効果がある。私の職場の近くはオーバーツーリズムで、交通安全のため立ち番をしている人たちの警戒心が強まり、交通規則を守れないタクシーの運転手を厳しく注意している姿が見られる。地域によっては色々な人の流入に伴う緊張感があり、地域の子供たちやコミュニティを守ろうとする強い防衛心が生まれる。一方で、そのコミュニティの中で子供たちを守り育むということを一人の人格の中でできるかどうか、そこが大事である。

【委員】

通学路の立ち番については、大津交通安全協会による研修や警察からの指導を受けてやっている。子供への声かけは我々もしているが、子供に向かって挨拶や声をかけるよう、先輩方から引き継いでいる。

【委員】

1日に5分だけでも子供の話を聞きましょうとテレビでも言っているが、忙しい保護者は聞かないし、講習会なども忙しい人や来てほしい人は参加しない。そこで、保護者が集まる夏祭りや学校行事に合わせて、子供の声に耳を傾けるよう啓発する機会を設けると、効果的で保護者に浸透すると思う。PTAがどんどん減る中で、聞いてもらいたい人に話を聞かせる機会をもっと作っていくべき。

【委員】

資料2の4番目のところには家庭による子供の体験の格差について書かれている。その話の横に「自分に自信をもって自分らしく生きることができる」とあるが、「達成目標」の赤文字で書かれたところとの繋がりがわかりにくい。また、取組の方向性は何となくわかるが、「達成目標」の「自分に自信を持って自分らしくいることができる」と子供が抱える課題がどう対応しているかわかりにくい。

【事務局】

体験活動を行うことで色々な経験ができ、自分に自信が持てるようになる。自信が持てないことを解消するには、色々な体験や、やったことがある、できるという気持ちが必要となるためそこに当てはめた。少し飛躍した表現になっているので、主語が子供ではない形を再考したい。

【会長】

資料2の「子どもが抱える課題」の主語は子供となっており、子供がこういう状態、若しくはこういう能力や気持ちを持っているという、子供の内面のことである。知識・技能・態度などの面で分類できることがあるかどうか。また、「自由に意見を表すことができる」で、「目標達成に必要な取組の方向性」の「子供の声を施策に反映させる工夫」については、今後、「こども基本法」の中で保障していくことになっていたと思う。

3年前に視察に行った山形県湯沢市では少年議会をやっていた。中高校生が自分たちで町長や議長を決めて、年間40万円程の予算で事業をするという内容で、投票権を持つ主権者としての力量を高めるという趣旨だったが、それ以上の効果を感じた。山村留学で来た学生が、山形県に暮らす中で社会の一員として認められ、この地域で暮らしたいという気持ちを持ったとのこと。単に子供の声を聞くだけではなく、子供の声を施策に反映させることによって、自由に自分の意見を表せる若者を育てることもできるなど、様々な効果がある。

達成目標の5番目「一人ひとりが尊重され、なりたい自分をめざすことができる」の「子供が抱える課題」の「学力不足、経済的な理由等で希望する学校に進学できない」について、15年くらい前の新聞記事によると、高校生が大学進学を断念する一番の理由について、大学関係者は学力不足、高校教諭は経済的理由だと回答するアンケート結果がある。このこと

から、資料の書きぶりも、順番を逆にして、学力不足ではなく経済的理由を前にもってくる必要があるかもしれない。低所得世帯に対する大学無償化の利用者が少しずつ増えており、このような学校の現実を見るとこの問題は考える必要がある。

【委員】

子供には、進学できないことが問題ではなくて他の生き方があるということを提示してあげることが必要。保護司として高校を中退した子供と話をした時、その高校にしか入れないから行ったがうまく行かず中退したと言っていた。本当は何がしたいのかを聞くと、板前さんに興味があるとのことだった。中学の先生なりがもっと聞いてあげていたら、自分の本当にしたいことを言えていたのではないかと思う。高卒で就職し、自分に経済的に余裕ができた時に大学へ進学する人もいる。その時は選べなかったが違う経験をして次の段階で選べるというのは、経験上とても良いことだと思う。

私たちの学区の小学校も集団登校がなくなった。理由は、集団登校だと横断歩道で信号が赤に変わりそうな時に、子供らが前の人に付いて渡るので危ないため。一方で、集団登校はなくさず、集団が途中で分かれても学校まで安全に行ってくれば良いという親の思いもあると聞いた。保護者の気持ちがバラバラの場合は、なぜそういうことになったのか意見を聞く機会も必要。私たちの学区には子供の安全会議のようなものがあるので、そのような場所で、地域で見守り活動をしている人、保護者、子供の意見や学校の様子がわかる人が情報を共有し合えると良いと思っている。

【委員】

話は戻るが、子供の思いを受け止めるというところで、どんな姿もそれでいいんだよと、まず大人が多様な子供の姿を肯定的に見ることが大事だと思う。それによって子供たちの心は安心する。安心できる大人に思っていることを伝えてみようかなと思い、伝えることで自分らしさを発揮していく。また、安心感を得られると挑戦する姿も出てくるし、挑戦する中で気持ちが安定していたら、失敗しても粘り強く頑張っていく経験にもつながると思う。自信がなくて不安定だと挑戦する気持ちは生まれにくいし、経験や生活体験の幅が狭まるので、安心感をベースに子供たちに関われればと思う。

【委員】

私が中学校の中で変わったと感じるのは、子供が失敗を恐れるようになったところ。昔はまずやってみるという感じだったが、今は、自分の中で成功する確率が半分以上になったときにはもうやらないでおこうという雰囲気になる。そんな時に周りの教師たちがポンと背中を押したり失敗しても良い雰囲気を作り出すことで、やってみようという気持ちが出てくると思う。準備や取り組みを一生懸命やっていれば、成功しても失敗してもその子のキャリアとなって次に生きるものだとして子供たちに伝えてほしいと、先生方に話している。

【事務局】

資料3、資料4、資料5について説明

【委員】

学校ともう少し気軽に話せる時間と場があれば良いと思う。実際に行動できることを増やし、地域に根差した取組をやっていきたいと思う。

【委員】

上田上の話が出ていたが、以前そちらの幼稚園で仕事をしていた。園の横の田んぼを地域の方が菜の花畑にしてくださったので、子供たちは菜の花が成長していく様子を見たり、花を摘みに行ったりした。その後、親子で関わることがないかと考え、地域の方との菜の花の苗植え体験や肥料やりについて保護者に声を掛けたところ、関心のある人が参加された。地域の方が協力してくださり、幼稚園での関わりが、小学校では菜の花漬けの体験になり、子供たちの体験が豊かになる様子を感じた。地域の方にとっても活躍できる場になっていたのではないと思う。また、地域には、子供が川で安全に遊べる場所作りや川遊びしてる時の見守りを進んでくださる方がおられた。子供のよりよい体験になっており、先生も学ぶことがあったし、地域の方にも活躍いただける良い流れができていた。小学校を卒業して中学生になってからも、地域活動に関わろうとする循環が生まれかけていたと思う。

【委員】

今お話しいただいたような成功事例を、誰もが目に触れられるような情報発信の仕組みがあれば良い。工夫やアイデアの広がり、それぞれの地域で生かされて良いと思う。ただ、この取組を、学校を核とした地域づくりと定義するのであれば、教員の負担をどうすれば軽減できるのか、働き方改革が実現できるのかを考える必要がある。学校を核としたと言うと聞こえは良いが、本気なのかを問いたい。働き方改革の流れの中で教員に何を担ってもらうのかを真剣に考えず、曖昧に「学校で」と言っていると誰も主体とならない。

私もボランティアベースで地域の親子の広場を運営しているが、地域には参画したい人たちもいる。情報がないとやりたい気持ちも掘り起こすことができないので、資料1「保護者に対する学習の機会や情報の提供」の情報の提供をどうするのか、どこに行けば情報が手に入るのかということを知りやすく発信していくことが大事。私が大学でやっている地域の親子の広場は天津市の「とも育」というアプリを使ったら、途端に爆発的に親子が集まるようになった。ホームページを見に行くのではなくプッシュ型の発信にするなど、情報を求めている人は発信方法を工夫すればひっかかってくる。最近は個人情報の関係でメールアドレスを収集するのも難しいが、何かの時にアドレスを収集して情報を発信させてもらう承諾を得るということを積み重ねると良いかもしれない。

【委員】

委員と同じ意見である。資料3と資料4を見ていると箱物っぽい感じがして、中身がよくわからない。先生がおっしゃるように、田上小学校、幼稚園の菜の花の会について情報の発信ができればイメージが湧くと思う。

【委員】

女性会で色々な活動をしているが、若い人との繋がりを作りたいと思っても実現しない。若い人はアプリを通してイベント情報をキャッチしているとのことだが、女性会でもそんなツールを利用できると良いと思う。

また、子育ては自分育てとよく言われるが、娘と孫を見ていると、子供を育てることで人はすごく変わると感じる。子育てをする中で、娘は今までしたことなかった読み聞かせのボランティアを始め、社会とつながることができた。同じような人がたくさんいるだろうから、情報が身近に入ってくるシステムがあると、地域とつながっていける。これを積極的に推し進めることで解決する問題があると思う。子育てによって成長している人の力は、社会を変える力になる。

【会長】

今の話は、今日最初の方でも発言されていた、伝わるべき人にきちんと伝わるという所につながる。きっかけがあれば、動ける人に伝わって動いてくれる。機会を見つけて動ける人たちにしっかりと情報を伝えることが大事。もう一つは、伝わっても動かないかもしれない人たちの意識をどう変えていくのかということ。どうすれば無関心な人の意識を変えることができるかを考えていくべきだと思う。

【委員】

コミュニティ・スクールを以前学校で見学させてもらった。色々な地域の人が学校の中に入り、その人ができることを通じて子供たちの体験を広げていくのは素敵なことだと思う。学校の教育、勉強の評価だけでなく、菜の花漬けが上手にできるというような子供への評価の視点の広がり、自分に自信を持てる子供を増やすことになる。声をかけてもらうことでつながりができて、たくさんの良いことが実現する。

ただ、小学校が37校ある中でこれだけしか進まないのは、何かハードルみたいなものがあるのではないかと。私は晴嵐小学校の学区で子ども食堂をしており、学校運営協議会に入らせてほしいのだが声がかからない。どうすれば一緒に子供のことを考える一員にならせてもらえるのか。こうした活動を広げていく上でのハードルについて聞かせてほしい。

【事務局】

学校運営協議会というのは、地方教育行政の組織及び運営に関する法律により位置づけ

られているもので、教育委員会では委員数を１５名までとしており、協力者会議とは違い、数の縛りがある。学校との関係性もあるため、どなたでもどうぞという形にできないところがハードルかと思っている。子供を通じて学校と関係を持っていただくと、学校から委員への就任について依頼があるかもしれない。

【会長】

天津市では学校運営協議会はできているが、協働本部が増えないのはなぜか。

【事務局】

協働本部については、活動されている人は誰でも入ってもらうことができる。運営協議会そのものは法に位置付けられた協議会であり、そこにすぐに関わっていただくことは学区によっては難しいこともあるかと思う。

【会長】

委員がおっしゃる趣旨は、コミュニティ・スクールはできているのに、なぜ協働本部にはならないのかということである。ボランティアや地域の団体が緩やかにつながるイメージで本部を設置していくのなら、うちにも声かけてくれれば手伝うのにとっておられる。

【事務局】

そこにつなげていく準備がまだできていないのだと思う。委員が子ども食堂で関わってくださっているのは確かに地域学校協働活動なので、それをつなげていけたら良いと思う。

【会長】

準備するのに学校の負担もあり、地域の成熟度合によってはコーディネーター役をやってくれる人がいるところもあれば、お見合い状態になっている地域もあると思う。そういったところをつなげて協働本部を作っていくコーディネーターは、各学区にいるのか。

【事務局】

運営協議会に一人、推進員を位置付けている。その人がコーディネーターとして活動をつないで本部の形を作っていく役割を担っている。

【会長】

所管部署の確認をしたいのだが、地域学校協働活動と活動本部は生涯学習課で、運営協議会は学校教育課か。生涯学習課と学校教育課との連携がもう少し必要ではないか。

【事務局】

それは事務局でも感じているところである。今説明したとおり、大津市では、コミュニティ・スクールは市立小中学校の全部に設置できており、実働部隊としての活動本部は7つできている。事務局は各学校に出向いて校長と接見し、本部の必要性について説明するなど、設置に向けた活動に取り組んでおり、今年度も増えると思う。ただ、活動内容は地域の実情や特性によって変わってくるため、そういったところも踏まえながら順次進めている。

【会長】

推進員をどううまくトレーニングするか、推進員にどう頑張ってもらうかが重要だが、どんな方が推進員をされているのか。

【事務局】

推進員は地域の団体のどこかに属されている方、例えば民児協、社協、学区民会議の役員やメンバーなど、地域の色々な役に就かれている方が多い。その方の動きに、地域学校協働本部を設置できるかどうかがかかっている。

【会長】

そこに対する研修や連絡協議会はあるのか。

【事務局】

年に2回、学校教育課と共催で、学校の地域連携担当教員と推進員を集めて合同で研修会をしている。

【会長】

その両者がうまくやれるかが大事である。自分たちで横の連携を考えることも必要。学校側も地域から色々と言われて身構えているから、地域の側も考えてあげないといけない。

【委員】

特に中学校では部活動を縮小する傾向にあり、部活の顧問を教員から放して地域の指導者に委ねる方向に向かっている。学校は、スポーツや吹奏楽などの文化系の活動を地域の指導者と連携して一緒に子供たちを育むため、地域の色々な指導者を求めている。その流れにこの問題も取り込み膨らませて力を合わせていけると、エポック的な機動力が生まれるのではないかと思う。

【委員】

どちらの課も譲りすぎだと思うので、遠慮せずにやってほしい。

【会長】

推進員を活かしきれていないのと同じで、学校にそこまでの余裕がない。それ自体をサポートする力を加えないと難しい。地域の人材の力を学校教育に活かしていきましょうという考えがこの中に入っている。

一番の課題は「活動に関わる地域住民等」が弱体化を始めていること。関心を持ってくれる人が減り、今まで活動されていた方が高齢化して次の担い手がない。次の担い手として当てにしていた人が、定年延長で地域デビューがさらに遅れているなど。「活動に関わる地域住民等」の力が弱くなってきている部分に関しては、大津市では自治協働課の領域になる。自治会活動、市民参画の三者協働に関わる部分を活性化していかないと、地域学校協働本部の活動の活性化にはつながらない。子供の課題の解決のところに落とし込むとすると、どうすれば良いかということを考える必要がある。

【委員】

栗津中学校にもようやく学校運営協議会ができたので、地域の方と協力していきたい。地域と学校が、子供をこういう風に育てたいという同じ目標を持ち、お互いどうすればいいか、何ができるのかを考えながらやっていけるのが一番良い。学校は授業、部活、校務分掌をした上にこの活動となり、コーディネーターの方は地域で忙しくしているので進めるのが難しい面もあるが、考えていかないといけない。

【会長】

運営協議会ができて地域との関係が深まることや、地域からの資源の活用のルートができるのは良いこと。一方で、地域そのものがそういった問題についての関心を高めているという状況をどうすれば作れるのかということが課題だと思う。また、関心があり関わっても良いと思っている地域の方がいても、うまくネットワークでひっかからないことがあるため、地域のネットワークを再構築する必要がある。

【委員】

私は運営協議会に民生委員として関わっている。学校や先生に負担をかけないよう、今の状況に少し足せばできることを学校に提案して、地域を好きになってくれる子供たちを育てている。毎年校外学習などで地域のおすすめの場所や公共施設を提案しており、地域のことをわかってくれる、好きになってくれる子が増えてきている。

私たちは自己有用感のためではなく、学校のため、学校の先生の居心地が良い形が子供たちのためになってほしいと思って活動している。人材不足で高齢化しており、老人クラブもなくなってきているが、小学校のクラブ活動などで子供に昔の遊びを教えるなど手伝ってくれる有志の人は残っている。

【会長】

地域の側が遠慮せざるを得ないのが一番の問題。それを前提に、何ができるかを考えないといけないし、もう少し学校に余裕を持たせるような環境整備が必要ではないか。

【委員】

私は学校に呼ばれた時は先生の意向を聞くようにしている。その方が地域の側の一方向的な意見にならないので良いと思う。

【会長】

活動に関わる地域住民等の中に、地域学校協働本部にある緩やかなネットワークで一緒に何かやろうという機運があり、ボランティア的な活動が学校教育にもある意味滲みでるような良い還元や、そこに行ってみようかという繋がりができること。学校を核にした地域づくり、学校や子供のためなら一肌脱いでみようかという人の力を借りながら学校教育を良くし、地域にプラスになるような。そのプロセスの中で、住民活動の次の時代の地域の担い手が育てられていくような工夫も必要。

いかに世代交代をして、持続可能なものにしていくのかという課題がある。本部の３要素として、コーディネート機能、多様な活動、継続的な活動があるが、それらを通じて、地域の人材そのものが育成されることが求められている。これを意識して力を入れてほしい。

以上で本日の審議を終了する。